

夢や希望、トロフィーに

石川・野木沢小6年生ら制作

環境問題に取り組む企業、団体の事業や提案を表彰する「低炭素杯」のトロフィーを、石川町の野木沢小学校6年生の18人と造形家の斉藤公太郎さん(43)が18日、作り始めた。原発事故に見舞われた福島県の子どもたちが夢や希望を形にし、全国に届ける。

「低炭素杯」は今年度で、省エネを目指す企業や団体、地球温暖化防止や、体、大学が参加し、今回は3回目。



子どもたちのトロフィーづくりを見守りながら「メッセージのバトンタッチ」と制作のイメージを膨らませる斉藤公太郎さん(中央左)

来月「低炭素杯」で贈呈 環境・原発テーマ

1353団体の中から40団体が最終審査に進んだ。来月、5団体が低炭素杯を受賞する。

石川町の仲田種苗園は昨年度、準グランプリにあたる環境大臣賞金賞(ソーシヤルビジネス部門)を受けた。仲田茂司社長(55)は受賞以上にトロフィーに感激した。「色も形も見ることがない。不思議な力があり、生命や希望を感じた」。宮城県石巻市の小学生と斉藤さんが、津波によるがれきを素材に作ったものだった。

受賞が縁で、斉藤さんも在来種生産を貫く仲田さんの事業を知り、感銘を受けた。原発事故による影響と向き合っている福島県の子どもこそふさわしいと、仲田さん

田さんの住む地区にある野木沢小を今年度のトロフィー共同制作者に選んだ。

素材は、仲田さんが所有する推定樹齢100年のオオモミジ。昨年11月に伐採、子どもたちが表皮をはぎ、斉藤さんやアーティスト仲間は加工しやすいように切って形を整えた。

18日、子どもたちは自分たちが書いた下絵を見ながら、思い思いのトロフィーを作り始めた。

「テーマは二つ。地球温暖化と環境問題。CO₂(二酸化炭素)を減らさなくては、と誰もが気付いているのにみんな知らんぷり。もう一つは原発のこと。皆さんだからこそ説得力のあるメッセージが発信

できるはずですよ」。斉藤さんの言葉をもちに、イメージを膨らませた。

近内祐太君(12)は土台にとげとげしい形の装飾をつけ、上に翼を広げた鳥が飛び立つさまを形にした。「下は原発事故とか災害を表し、そこから未来に向けて羽ばたく」と話す。作業を見守る斉藤さんは「それぞれのイメージをどう引き出せるか。困った時だけ声をかける。それまでは我慢です」。19日には色を塗って完成させる。

来月の表彰式で受賞者に渡すトロフィー5体は、子どもたちが作品に込めたメッセージを斉藤さんが引き継ぎ、「福島県の思い」として結実させる。

子どもたちの制作を、宮城大学で建築や建築設計を学ぶ学生、大学院生4人が手伝った。石川町を舞台にした日本造園学会の学生ワークショップにも参加し、野木沢地区はじめ町の人たちと交流を続けている。

事業構想学研究科修士1年の相田菜美さん(23)は「未来に向けた階段とか、一人ひとりが確かなイメージをもってい

「イメージ、どんどん形に」手伝った院生ら

て、どんどん形にしていくな。びっくりしています」と感心しきり。事業構想学部3年の遠藤健太さん(21)は宮城県南三陸町出身で、自宅を津波に流された。高校も石巻市内だっただけに、「災害や原発事故を忘れては欲しくないけれど、次の世代には、未来に向けた夢のある形にしてほしい」。そんな思いを抱きながら見守っていた。

(西村隆次)